

白水社編集部編『「その他の外国文学」の翻訳者』 (2022年 白水社 227頁)

佐々木 正徳

『「その他の外国文学」の翻訳者』(以下、本書とする)はwebマガジン「webふらんす」(<https://webfrance.hakusuisha.co.jp/>)で2020年12月～21年10月にかけて連載された『「その他の外国文学」の翻訳者』をもとに加筆修正および新たな原稿を加え刊行されたものである(本書228頁)。文中に特に言及はないものの、白水社編集部の担当者がインタビューしたものをまとめたような文体で、9名の「その他の外国文学」の翻訳者が紹介されている。複言語・複文化主義を念頭にカリキュラムを構築・運営している外国語教育研究センターの教職員にとっては、金言が散りばめられた好著である。

本書の一つ目の特長は、単純にマイナー言語およびマイナー言語文学の紹介や翻訳にまつわる苦勞を紹介するに留まらない点である。例えば、ヘブライ語文学を翻訳する鴨志田聡子氏のもともとの専門はイディッシュ語であり、ユダヤ人の言語がヘブライ語だけではないことが示される。ポルトガル語翻訳者の木下眞穂氏はポルトガル文学でもブラジル文学でもなく、アンゴラ文学を翻訳することで、国名=公用語ではないことが何を意味するのか、近代以降の世界史への関心を読者にもたらし。チベット語の星泉氏は、チベットの人々と数多く接し雑誌や映画イベントなど多様な翻訳経験を積むことで自身がラサを中心とする価値観にとらわれていたと語り、(日本から見て)マイナーな文化圏の内部にも中心と周辺がある(という本来は当然の)ことを読者に気付かせる。意図したものかどうかは不明であるが、マイナーというのはあくまで日本における感覚であること、そして仮にマイナーであったとしても、その中に更なるマイナーがあることを明らかにすることで、読者の価値観の相対化を図っているのである。

本書のもう一つの特長は、言語教育への知見が多数得られる点である。例えば、先述の星泉氏はチベットの牧畜文化のフィールドワークを行い、「糞」に対する訳語が非常に豊富なことなどを明らかにした。成果は『チベット牧畜文化事典』として刊行されている。言語を知ることはその言語が話される地域の文化や人々の思考様式(世界観)を理解することだとはよく言われるが、事典を読むとそのことがよく分かる。一方、タイ語の福富渉氏は、文学作品を訳出する際、読者の理解を促進しようとしてつける訳注がオリエンタリズムではないかと考え、意図的に減らしている。言語学習を通して当該地域の文化や社会について知ることは重要であるが、それが安易な特殊性の強調に留まるなら、つまり「あなたたちの文化はあなたたちのもの、私たちの文化は私たちのもの」という差異のみを強調するものとなるなら、それは排他性の表出に他ならず、異文化に接することのもう一つの意義である「共通点に気付くこと」が

蔑ろにされ「相互理解」が覚束ないものになってしまう。脚注に頼ることのない翻訳を通して作品そのものから感じられるメッセージを読者が受け取ることができれば、換言するなら作品自体の魅力が伝われば、それは言語と文化を超えた普遍性を認識する契機となる。チェコ語の阿部賢一氏は、チェコ語の後にフランス語も修得することで、日本・チェコ・フランスという三者比較の視点を手に入れた。文に潜む含意に気付き正確に訳出する上で、二言語間翻訳ではなく複数言語で訳出することは非常に有用な方法である。上記の福富氏のアイデア実現にも寄与すると思われるし、複数言語を学ぶ意義を示している。そして、ある言語を修得することで別の言語の学習が容易になるという複数外国語学習者ならではの利点を体験をもとに話している。外国語教育においてはこの点をもっと強調すべきであろう。

丹羽京子氏は教材不足というやむをえない事情から、ベンガル語をベンガル語で学んだ。文学作品を読破し続けていくうち、ベンガル語の音の感じや表現の面白さ、物語の盛り上がる場所に共感できるようになったという。金子奈美氏はバスク語の修得にあたり、バスク語話者とのメールのやりとりが役に立ったと考えている。書くときは文法に気をつけるし、返信をよく読むことでネイティブ表現が蓄積していくからである。先述の木下眞穂氏もポルトガルの友人と頻繁に手紙のやりとりをしたことが実力向上に繋がったと、インプットの重要性について語る。いずれも学習言語を教授言語とすることの利点であり、特に金子氏と木下氏は読み書きの実践が会話でも大いに役立ったと述べている。他にも多くの作者が語学の修得においてインプットとアウトプットの双方を同時進行で伸ばしていくことが重要であることを示唆しており、その方法などは、語学教育を担う立場として大いに参考になる。

本書の更なる特長は、後進へ複数のロールモデルを示したという点である。翻訳家を夢見る学生が一定数存在するのと同時に、外国語を学んで何の役に立つのかと疑問をもっている学生たちも今昔問わず存在している。本書を通読すれば、そのどちらの層も外国語学習に対する肯定的なメッセージを受け取ることができるであろう。例えば、チェコ語翻訳者の阿部賢一氏がフランス語の修得を目指したのは、自身のアカデミックキャリアを考えてのことである。マヤ語翻訳者の吉田栄人氏はもともとスペイン語を専門として学んでいたところ、スペインではなくメキシコに留学したことでマヤ語に出会う。ノルウェー語翻訳者の青木順子氏のノルウェーとの出会いは誤植で安い金額が記載されていたノルウェーフィヨルドツアーに参加したことであった。吉田氏、青木氏ともに、外国滞在が思わぬ形で人生の幅を広げ、現在に至っている。翻訳家へのなり方は、特にマイナー言語の場合には特定のルートがあるわけではない。また、外国語学習に限ったことではないが「役に立つ」か否かは事後的にしか振り返ることはできない。本書は9名の多様な人生を示すことで、外国語学習肯定派・否定派両者の疑問への回答となっている。

現代の高等教育は専門性の高度化・複雑化とともに、教養教育の重要性が叫ばれる状況におかれている。外国語教育は、もとより一部の学部学科を除けば、教養教育の場で多くの学生たちに知を提供してきた。マイナー言語を職業としている方たちの語りという専門性の極みともいえる本書が、むしろ教養としての外国語教育を提供する

上で大きなヒントとなっているという点は非常に興味深く、時代に即した教養としての外国語教育の可能性を示しているように感じられる。